

二〇二五年度・学力考査問題【国語】

(中学第二回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は13ページで㉠・㉡・㉢の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

線①②のひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 兄は役場につとめている。
- 2 温暖なきこころを好む。
- 3 事故で車体がそんしょうする。
- 4 相手にしせんを送る。
- 5 キャッシュレスけつさいで支払う。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

高校生の「僕」は、得意なキーボード操作を生かして、修学旅行の思い出を自宅のパソコンで打ち込んでいる。本文は、班ごとの自由行動を翌日に控えた夜の場面である。

室長たちが集められている間、「僕」は同じ班の「小川楓」と「蔵並」とともに、ホテルの広い宴会場の床に座ってくつろいでいる。実は学校に内緒で、「僕」は単独行動をとろうとしている。それに対して「楓」は興味を示すが、「蔵並」は気が進まない。そこへ、引率教員の一人、「高村先生」がやってきた。

いよいよ明日ってこともあって、蔵並の表情は硬い。小川楓も気がかりな様子だったけど、見回りの高村先生がやって来ると気の置けない笑顔が浮かべた。しばらく見上げ、相手を十分引きつけてから言った。「高村先生はあ、友達が困ってたら助けてあげた方がいいと思いますかあ？」

「なに、その質問」高村先生は身を引くしぐさで応えた。「あと言い方」小川楓は「どうですかあ？」と続ける。

先生が考えこむ間、僕はちよつと気を引き締めた。蔵並に訴えかけるために、そういう質問をぶつけてる風だったからだ。

「友達が必要ない人もいるじゃない？」と先生は言って、僕のことだけを見なかった。「だから、友達がついていうんじゃないかって、困って

「人がいたら——」そこで先生は何か新しく言うべきことを思いついたらしかった。

蔵並を盗み見たら、口開けて先生を見上げていた。確かに、こんな下からなめるように見上げることなんて滅多にないだろう。

「宮澤賢治がさ」と笑顔で始めた先生の担当は現国だ。

小川楓が「また？」と言いながら髪をかき分けて耳を出した。先生の宮澤賢治好きは有名で、卒論や聖地巡礼の話も授業中に何度も聞いた。

「先生をやっていた時、よく生徒を川遊びに連れて行ってたんだって。何日も勝手に泳いで遊んでただけど、ある時に救助係の人と話す機会があつて、その人が自分たちの知らないところでさりげなく目を光らせてくれたことを知って、すごく反省するの。自分は、溺れてる子供を助けることはできないから、せめて一緒に溺れてやろうとしか考えてなかったって」

こんなところで「イギリス海岸」の話をしてくれる細くて美人で朗らかな先生という存在がどう思われるか知らないけど、修学旅行の引率をしている中でそういうことを思い出してくれる先生っていうのは、確かにすごくありがたいことだよ。

「一緒に溺れてやろうって人と、助けてやろうって人がいるわけだろじゃあ、楓が川で溺れるととしてさ」小川楓のこと、授業中じゃなかったらそう呼ぶんだよ。まあ、うちのクラスに小川がもう一人いるからつてもあるんだけど。「どつちに来てほしい？」

「助けてくれる人」

「それって」と蔵並は喋る前から頬がゆるんでいた。「生きるか死ぬ

かって質問になつてませんか？」

「そっか」予想外の質問だったのか、先生はちよつとはにかんだ。「質問として成立しない？」

「しませんよ」

その楽しそうな笑顔ときたら、天にも昇るような感じだった。予感が確信にいついより、僕は思わず、おい、よかつたじゃないかつて具合に肘で小突きそうになつたぐらいいだ。

「他に意見は？」

先生はその余韻を楽しむ間もなく言った。水を向けられていることがわかつたけど、僕は黙っていた。蔵並の手前とか、くだらないことを考えていたのかも知れない。すると先生は、僕を見て言った。

「なんか言いなよ」

ざつくばらんとした訊き方は、何かを期待してみたいだった。興が乗ってきたのかいつの間に腕組みして、胸が窮屈そうに強調された。小川楓が膝を立てるように足を動かした一瞬、スカートの隙間から右の腿裏が青白く覗いた。どんなにマシなことを考えている時でも、そういうものが目につくんだ。目につくだけだよ。ネズミがさつと走つてドキツとするみたいなんでも、ドキツとしたくてネズミを見たわけじゃないんだ。ネズミのことは嫌いじゃないし。でもなんでネズミなんだ？

ああ改行、また助けられた。早いとこ先生の質問に答えよう。長い学校生活とか長い人生、僕はこういう問われる場面じゃ
A
こ
とに決めるんだけど、この時はどうかしてた。

B
つて言うけど、僕がなんかマシなことを考えてるかもと勘

繰ぐるつてくれる人に、マシなことを言いたくなっちゃったんだな。いつも思うんだけど、期待に応えるってのは限りなく恥はに近いことだ。よく覚えていないけど、僕はこんなことを言ったと思う。

その二人——つまり一緒に溺れてやろうって人と、助けてやろうって人——が両方そこにいたら、溺れてる人はきつと助かる。助けてやろうって人がちゃんと助けて、一緒に溺れてやろうって人はただ見ているだけだ。でもその時、ただ見ていたその人が一緒に溺れてやろうって人だったかなんて誰にも、自分にさえわからない。その人がそういう人だったってわかるのは、ほんとに一緒に溺れた時だけだ。でもその時、最初に溺れていた人も、見ている誰も、その人が一緒に溺れようとしたとは思わない。助けようとしたと思うだろう。その人は溺れて薄うすれゆく意識の中で、たった一人、自分が一緒に溺れてやろうとして、何をわかってるのだろうか。「だとしたら、その人が一緒に溺れてやろうって考えながら生きていることは、どういう意味があるのかって、僕はなんか、そういうことが無む性に気きにかかるんです」

僕の考えだとあの宮澤賢治ってのは、一緒に溺れてやろうって人でありたくて、それがどういふことを死ぬほど考えたいがために死ぬわけにはいかない死ぬほど倒錯※4した奴やつなんだ。僕はそれに共感する一方で、騒動さうどうとは何の関係もなく残った甲斐性かいせいなしの樅もみの木みたいに思Yってしまふんだよな。

高村先生はすくく何か言いたげに僕を見ていた。興奮しているようにも見えたけど、室長組が戻ってきたから話はおしまいになった。

(乗代雄介「それは誠」文藝春秋より)

※1 現国：高校で行われる授業の科目名の略。

※2 興きようが乗のってきた：おもしろさが高たかじてきた。

※3 ああ改行：パソコンで入力している文章が長くなりすぎたと気づいて、改行のキーを押した際、「僕」は改行操作をしたこと自体も入力している。

※4 倒錯とうさく：一般的なものの考え方や感じ方とは異なる状態にあること。

問一——線 a 「気の置けない」・b 「水を向けられている」とあ

りますが、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 気の置けない

ア 心から打ち解けたような

イ 心配事がないような

ウ 小ばかにしたような

エ 取とってつけたような

b 水を向けられている

ア 沈黙ちんもくを非難ひなんされている

イ 発言はつげんを促うながされている

ウ 突き放つされている

エ 助けられている

問二 A・B に入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。Aには「いいかげんにその場をこまかす」、Bには「ふだんならできないようなことも平気でする」という意味で用いられることわざ・慣用句が入ります。

A

ア 二の足を踏む

イ 出鼻を挫く

ウ お茶を濁す

エ 舌を巻く

B

ア 聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥

イ 牛にひかれて善光寺参り

ウ 頭隠して尻隠さず

エ 旅の恥はかき捨て

問三 線「僕はちょっと気を引き締めた」とありますが、こ

の時の「僕」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」が単独行動を計画していると先生が気づいてしまわ

ないように、なにげない風を装っている。

イ 話の勢いから、楓が先生にうっかり「僕」の単独行動を明かしてしまうのではないかと心配している。

ウ 先生が間に入ってくれることで、蔵並に対する気まづさが改善に向かうのではないかと期待している。

エ 先生がどのように答えるのか、そしてそれに蔵並がどのように反応するだろうかと思つて緊張している。

問四 —— 線X「イギリス海岸」の話とありますが、次に示す「文章Ⅱ」は「イギリス海岸」について「高村先生」が紹介する部分です。これを読んで、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。

【文章Ⅱ】

「お暑うござんす。」私が挨拶しましたらその人は少しきまり悪そうに笑って、「なあに、おうちの生徒さんぐらい大きな方ならあぶないこともないのですが一寸来て見た所です。」と言うのでした。なるほど私たちの中でたしかに泳げるものはほんとうに少なかったのです。もちろん何かの張り合いで誰かが溺れそうになったとき間違ひなくそれを救えるという位のものは一人もありませんでした。だんだん談してみると、この人はずいぶんよく私たちを考えていてくれたのです。救助区域はずうっと下流の筏のところなのですが、私たちがこの気もちよいイギリス海岸に来るのを止めるわけにも行かず、時々別の用のあるふりをして来て見ていてくれたのです。もつと談しているうちに私はすっかりきまり悪くなってしまいました。なぜなら誰でも自分だけは賢く、人のしていることは馬鹿げて見えるものですが、その日そのイギリス海岸で、私はつくづくそんな考えのいけないことを感じました。からだを刺されるようにさえ思いました。はだかになって、生徒といっしょに白い岩の上に立っていました。まるで太陽の白い光に責められるように思いました。全くこの人は、救助区域があんまり下流の方で、とてもこのイギリス海岸まで手が及ばず、それにも係わらず私たちをはじめみんなこっちへも来るし、殊に小さな子供らまでが、何べん叱られてもあのおぶない瀬の処に行っていて、この人の形

を遠くから見ると、通じてどての蔭や沢のはんのきのうしろにかくれるものですから、この人は町へ行つて、もう一人、人を雇うかそうでなかつたら救助の浮標を浮べて貰いたいと話しているというのです。

そうして見ると、昨日あの大きな石を用もないのに動かそうとしたのもその浮標の重りに使う心組からだったのです。おまけにあの瀬の

処では、早くにも溺れた人もあり、下流の救助区域でさえ、今年になつてから二人も救つたというのです。いくら昨日までよく泳げる人でも、

今日のからだ加減では、いつ水の中で動けないようになるかわからな

いというのです。何気なく笑つて、その人と談してはいましたが、私はひとりで烈しく烈しく私の軽率を責めました。実は私はその日ま

でもし溺れる生徒がきたら、こっちはとても助けることもできないし、ただ飛び込んで行つて一緒に溺れてやろう、死ぬことに向こう側

まで一緒にいて行つてやろうと思つていただけでした。全く私たちにはそのイギリス海岸の夏の一刻がそんなにまで楽しかったのです。そして私は、それが悪いことだとは決して思いませんでした。

(宮澤賢治「イギリス海岸」)

※5 殊に…とくに。

※6 はんのき…植物の名。水辺を好む高木。

※7 心組…心づもり。考え。

(1) 線2「だんだん談して〜くれたのです」とありますが、「私」はどのようなことに気づきましたか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たち遊泳者に危険が及んだ際に、助けることができるように救助係が気を配ってくれていた、ということ。

イ 自分の判断のほうに救助係よりも正しいという自信があったが、思い違いであった、ということ。

ウ 自分と生徒が一緒になつてはしゃいでしまつていたことで、周りに迷惑をかけていた、ということ。

エ イギリス海岸は救助係の担当区域ではないため、自分一人では万が一の際に生徒を救えなかつた、ということ。

(2) 線3「私はひとりで〜責めました」とありますが、この時の「私」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 救助係が自分たちを見守つてくれたから安全に遊べていたと気づいたものの、感謝の気持ちを伝えられなかつたことに対して、大いに恥じている。

イ 生徒を思う気持ちは誰にも引けを取らないと思つていたが、彼らを死の危険にさらしていたことを思い知らされ、教師としての未熟さを痛感している。

ウ はしゃぐ生徒を止めるどころか一緒に楽しんでいたことが、救助係にとつてどれほど迷惑であつたかということに思い至り、大人として深く反省している。

エ 軽視していた救助係の話によって死の危険を思い知らされたことで、一緒に溺れて死んでやろうという心づもりが浅はかだつたと、強く後悔している。

(3) 線4「もし溺れる〜ついでに行つてやろう」とありますが、このような思いに対して、「僕」はどのように考えていますか。【文章I】を踏まえたとうえで、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 助けようとする人がきつと先に行動するだろうから、別に賢治が何をどう思つていようと状況は変わらないのではないか。

イ 賢治と一緒に溺れたところで失われた魂の救済になるはずもなく、さらに言えばそれは助ける意思がないのと何ら変わらないのではないか。

ウ 生徒が溺れたらともに溺れて死んでやろうという賢治の生き方は理解しがたいものの、わかる部分もあり、考え続けずにはいられない。

エ 献身的な賢治の思いに共感するものの、自分が実際にそのような場面に居合わせたとしたら、かわりを持つまいとして木のように突っ立っているだけだろう。

問五 —— 線Y「高村先生はすくく僕を見ていた」とあります

が、この場面の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア パソコンで入力しながら旅行のことを思い返してみると、賢治について自分なりの意見を語る「僕」に刺激を受けた先生は、それを受けて「僕」と賢治についてもっと語り合いたいと思っっているように見えた。

イ 旅行の思い出を振り返ってみた「僕」は、賢治について否定的な意見を述べた「僕」に対し、先生は授業で繰り返した扱ったテーマを「僕」が理解していなかったことにいらだちを覚えたのだと気づいた。

ウ 旅行中の夜を振り返ると、先生は「僕」が賢治と同様に生きることの意味を見失いかけていることに気づき、将来に対する希望を見つけてほしくて何らかの助言をしようとしてくれたのだと考えた。

エ パソコンを打ちながら旅行を思い返すと、先生は「僕」が賢治について頭の中で堂々めぐりをしている様子を見て、賢治を研究していた一人として彼の真実の姿を教えようとしていたのだとわかった。



次の文章は、ピアニストで科学者の「古屋さん」の研究について書かれたものです。彼はピアニストが長く健康に演奏できるように、「エクソスケルトン」という装置を開発しました。これは両手指に装着し、スイッチを入れると、指を機械的に動かして演奏を補助し、曲が弾けるようにしてくれるものです。次にこれを外して練習すると、それまで弾けなかったフレーズが弾けるようになることから、彼は「エクソスケルトン」を体の動かし方の習得を助ける「感覚トレーニング」のツールだと語ります。以下、本文はその続きです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

古屋さんがピアニストの感覚トレーニングに注力する背景には、ピアニストのサステナビリティの問題があります。サステナビリティ、つまり長く健康に演奏し続けられることです。思い込みで体と付き合ってしまう、あわない練習を繰り返して、結果的に手を壊してしまうピアニストが非常に多いのだそうです。

特に多いのはジストニアです。ジストニアとは、本人の意志に反して筋肉が縮こまったりこわばったりする病気。同じ動きをする人がなりやすく、ピアニストは一般の人にくらべて高い発症率を示しています。

有名なのはシューマンです。シューマンは作曲家として知られていますが、もともとはピアニストを目指していました。一九世紀的ピアノ環境の中にいたシューマンは、独自に開発した機械で「筋トレ」を行っていたのです。ところがそのせいで右手を痛め、ジストニアを発症してしまっただけで、そこから回復することができず、ピアニストになる

夢を諦めざるを得なかったと言われています。

古屋さんにとって、シューマンはまさに「反面教師」だと言います。「そこでの教訓は、負荷をかけすぎてはいけない、ということですから。器具を設計するときに指を動かそうとする方向に引つ張ることも考えうるんですが、シューマンの例があるので、それはしちやいけないな、と思って」。

さすがに現代においては、シューマンのような器具を使うことは少ないでしょう。だとしても、ピアニストは、うまく弾けない状態に陥ると、その原因を自分の練習不足だと思ってしまうがちです。調子が悪いなら休むべきなのに、ますます練習量を増やしてしまう。しかもその練習の内容が間違つたものであると、うまく弾けるようになるどころか、症状を悪化させるだけです。

ここには、ピアノの練習の根本的な盲点があります。それは、どうしても「音」のために練習してしまう、ということ。結果、「体」が無視されてしまうのです。「この音を出したい」という目的が先行し、「自分の体は今どのような状態なのか」「体にとってふさわしい練習とは何なのか」という視点が抜け落ちてしまう。テクノロジーを使って、体に対する感覚を高めることができれば、こうした無駄な無理をふせぐことができるようになります。

感性の観点から「自分はこんな音を出したい」と思う範囲は広いと思うんですけど、その中で「体が鳴らせる範囲」はもつと狭くって、絞り込んでいくんですよ。そこが、その人の鳴らせる範囲だし、練習するべき範囲なんですよ。そこで、いかに効率よく

練習していくかということのお手伝いをほくはさせてもらっている、という感じですよ。

これは、単にジストニアのような症状が出ているときだけの話ではありません。A、ピアニストと言ってもひとりひとり体の条件が違います。手の大きい人もいれば小さい人もいるし、スキニーな人もいればふくよかな人もいます。当然、体が違えば出る音も違います。つまり、その体ならではの勝負の仕方がある。その違いを無視して同じゴールに到達しようとしたら、やがて体は壊れてしまいます。

ピアニストとしてコンクールに出られるのは二八歳くらいまでだと古屋さんは言います。その間に間違つた練習をしていたら、すぐにピアニスト人生が終わってしまう。「魚屋さんに行つて高級魚を買つたら、余すところなく食べたらいじやないですか。だから、もつたいたい食べ方をしないように、みなさんの体を余すところなく食べられるようにするのがテクノロジーの仕事かなと思つています」。

つまり、古屋さんがピアノに対して身体制御の観点からアプローチするとき、それは「体に注目せよ」という当たり前のようである前ではない、強いメッセージを含んでいるのです。一九世紀のような軍隊式ではないとはいえ、日本の古いピアノ教育は主に技術偏重で、体を観察することには重きが置かれていませんでした。いわば、体を透明化することが目指されてきた。「その体だからこそその音楽性」ではなく「音楽性をさまたげない体」が良しとされてきたのです。

私自身、子供のころにピアノを習っていて、「体を消す」ことを意

識させられることがたびたびありました。たとえば「五本の指ですべて同じ音を出せ」という練習。親指と小指なんて形も長さもついている位置もまったく違うわけですから、「同じ音を出す」とは「それぞれの指の差異を消す」ことに他なりません。幼いころ、これに相当苦労したことを覚えています。

しかしたとえば超絶技巧の代名詞のように言われるシヨパンでさえ、そのような弾き方はしていなかったようです。シヨパンは生涯を通じて合計一八〇名ほどの弟子を育てたとされていますが、その弟子たちが回顧するところによれば、彼は指を強制的に均一にする教えに反対し、運指を工夫するなどして指の非均一性や個性が多様な響きを生み出すような弾き方を教えていたようです。

シヨパンは、こんな言葉を残しています。「指の力を均等にするために、今までに無理な練習がずいぶん長い間行われてきた。指の造りはそれぞれに違うのだから、その指に固有なタッチの魅力を損なわないほうがよく、(…)逆にそれを充分生かすよう心がけるべきだ」。もともと、固有性を生かすためには、それぞれの指を独立に動かせるようになることが不可欠なのですが。

古屋さんが「可視化」というとき、それはこのような文脈で理解しなくてはなりません。つまり、前提としてピアノにおいては体が「透明化」してしまいうすいという現実がある。音にばかり注意がいき、体はその従順な実行部隊であることが理想とされているからです。

B、それでは体に負荷がかかる。体の可能性が十分に引き出されないどころか、ピアニストとしての生命を棒にふることになりかねません。

だからこそ、演奏を「可視化」することによって、ピアニストが自分の体に正しい意識を向けられるようにすることが必要です。この意味でも、「こうすればうまくいく」という思い込みの外に、テクノロジーを使って出ることが有効です。

そんな「可視化」を実現するテクノロジーが、古屋さんが開発したもうひとつの装置です。

装置全体はピアノの外の機構と、内部の機構に分けられます。ピアノの外には、ピアニストの動きをとらえる四つのカメラが設置されています。これで、ピアニストの手の動きのみならず、体全体の動きを撮影することができます。

内部の機構は、ピアノのものにも細工がしてあります。ひとつひとつの鍵盤の下に、光を発する装置とその反射光をキャッチするセンサーが埋め込まれていて、基準点から鍵盤までの距離を計測することができますのです。どの鍵盤が、いつ、どのくらいの深さとどのくらいの勢いで押されたか。**C**「タッチ」を可視化することができます。どのメーカーのピアノでも、二〇分もあればこの装置をセットすることができるように工夫されています。

重要なのは、タッチの動きと全身の動きを同期して記録できるようになっていることです。どのタッチのときにどのような体の動きになっているか、古屋さんが開発したシステムだと、一〇〇分の一秒レベルの厳密さで対応が取れているといえます。ピアニストの感覚は非常に繊細です。そのくらいの厳密さでないと、「ピアニストが意識できないこと」とどこかないのです。

私自身、古屋さんのラボで週末に実施されているレッスンを見学させてもらいましたが、ピアノリストの感覚の繊細さには舌を巻くばかりでした。中学生、高校生のトップレベルの生徒さんの授業だったのですが、まさに音をひとつずつ、先生といっしょに作っていくような授業なのです。「ピアノの掃除したことある？ ピアノって大きいよね。ちゃんとこのサイズから出てる音なんだって分かるように弾いて」その響かせ方だと、ヴァイオリンが入ってきたときにお客さんが『何で？』って思っちゃうよ。正直、私にはその違いが分からないようなレベルで、音色をひとつひとつ磨きあげてゆくのでした。

楽譜の解釈にも驚かされるばかりでした。D、同じ「速く」でも、モーツァルトの時代の「速く」と、現代人の「速く」では質が違うと言うのです。現代人の「速く」はロケットや高速列車ですが、一八世紀の人にとつての「速く」は馬車であり、ドレスを着て走ることで、「もつとがちゃがちゃした感じがあつていい」と先生はアドバイスしていました。

こうした「音」レベルのレッスンを「体」の面からサポートするのが、古屋さんの役割です。レッスンでは可視化システムつきのピアノが用いられ、演奏の様子が随時記録されています。レッスン中はデータをみる事ができなくても、あとから振り返れば、先生の弾き方と自分の弾き方がどう違うか、身体運動レベルで確認することゝできます。オンラインのカルテが作られていて、細かいフィードバックがなされます。エクソスケルトンが意識の届かない領域に²を連れ出してくれる装置だとすれば、この可視化システムは、意³でできる領域を増やしてくれる装置だと言えます。「思い違い」を⁴してくれるのです。

古屋さんは、多くのピアニストが手しか見ていない、と言います。しかし、解剖学的に見れば、指の動きは前腕と、前腕の動きは上腕と、上腕の動きは鎖骨と、鎖骨の動きは顎の位置と、運動しています。つまり「体全体」を見なければなりません。だからこそ、カメラを使って、手元だけでなく全身を記録する。先生が指導する、この音を出せという「What」を、体の動きの可視化を通じて「How」に変えてくれるのが、この装置の役割だということになります。

このように見ていくと、体に注目するという古屋さんのアプローチそのものが、ピアノの教育システムが歴史的に醸成してきた「こうすればうまくいく」の外側に光を当てるものであることに気づかされます。「それゆえにぶつかることも多いのでは？」というこちらの質問に、古屋さんは「ぼくがやるのはあくまでもサジェスチョン」と答えます。「こうしたらどうですか」と提案するのであって「こうすべき」と指示はしない。「ピアニストが芸術に集中できるように、土台となる体の使い方を支えたい」。

とはいえ、「みなさんの体を余すところなく食べられるようにするのがテクノロジーの仕事」という古屋さんの言葉は、ひとつひとつの体の可能性と限界の上⁶にしか、サステナブルな表現はありえないという希望と絶望を含んでいます。人は、自分の体のことをほとんど知りません。古屋さんの技術は、「私の知らない私の体」に気づかせてくれる、鏡のような存在なのかもしれません。

(伊藤亜紗「体はゆくできるを科学する(テクノロジー×身体)」

文藝春秋より)

問一 ——— 線 a 「反面教師」・ b 「棒にふる」・ c 「舌を巻く」とありますが、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 反面教師

- ア 思い込みの危険性を教えてくれる人
- イ 教師としての能力に欠けた人
- ウ くり返してはならない悲劇
- エ 学びを得るべき失敗例

b 棒にふる

- ア それまでの積み重ねを台無しにすること
- イ 行動を起こすことで災難にあうこと
- ウ 何をやっても裏目に出してしまうこと
- エ 自らの状況を非常に険しいものにする

c 舌を巻く

- ア 思いがけないことに驚きあきれること
- イ 言葉を失うほど驚き感心すること
- ウ 相手の勢いに圧倒あつぱうされること
- エ 感動に身体が打ち震ふるえること

問二

A

D

 に入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってはけません。)

- ア もし
- イ つまり
- ウ そもそも
- エ しかし
- オ たとえば

問三 ——— 線 1 「ピアノの練習の根本的な盲点もくてん」とありますが、そ

れはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 楽譜の再現にのみ注力しようとするあまり、自分が出した音があつたことをいつの間にか忘れてしまう、ということ。
- イ 自分がイメージする音を鳴らそうとすることばかり意識して、自分の体の状態をかえりみない、ということ。
- ウ 練習量を増やしたことで筋肉を痛めてしまい、かえって弾けなくなるといふ悪循環あくじゆんかんにおちいってしまふ、ということ。
- エ 自分が鳴らしたいと思う音色を求めるといふあまり、演奏技術に見合った曲を探さなくなってしまう、ということ。

問四 —— 線2 「魚屋さんに行つて（ ）思っています」とありますが

が、ここで「古屋さん」はどのようなことを言おうとしていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ピアニストは、演奏技術に関してどこでピークを迎えるかは人それぞれである。したがって、テクノロジーを駆使しながらコンクールに向けてピークを合わせることが必要である。
- イ ピアニストは、大きなコンクールに参加し、入賞することではじめて社会的に評価される。そして継続して高い評価を得るためにはテクノロジーを利用した練習が不可欠である。
- ウ 優れた素質を持つピアニストであっても、コンクールで活躍できる期間は短く限られた時間の中で彼らが実力を発揮できるように貢献することがテクノロジーの使命である。
- エ コンクールに出るピアニストは皆、天性の才能を持つ者たちであり、敬意を払われるべきである。そして彼らの存在を広く知られるようにすることがテクノロジーの役目である。

問五 —— 線3 「体を透明化することが目指されてきた」とありますが、それはどのようなことですか。「シヨパン」の言葉や教え

を踏まえて四十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線4 「演奏を『可視化』（ ）ようにする」とありますが、

それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 演奏者が自己の演奏スタイルに自信を持ち、それを重視することができると同時に、技術的な限界について充分に認識した上で練習に取り組むことができる、ということ。
- イ 演奏者が自身の体にどこまでの動きが可能かを自覚することができ、その上で、限界を乗り越えるために全身を駆使して演奏しようという姿勢をもつことができる、ということ。
- ウ 演奏者が出せる最良の音がどのようなものかを実際に聴くことによって、今まで自分が出してきた音や、出したいと思っていた音とのずれを理解できるようになる、ということ。
- エ 演奏者が、自分にできる体の動かし方を実際に見て意識できるようになることで、自分に適した音の出し方や演奏できる範囲についてもイメージできるようになる、ということ。

問七 —— 線5 「この音を出せ」になります」とありますが、こ

こでの「この装置の役割」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 先生が求める音を出すために、生徒に手だけでなく体全体の動きを把握できるようにし、どのように音を出すかを意識できるようにすること。

イ 生徒が理想の演奏を目指す上で、無理やりに先生の求める音を出そうとするだけでなく、自分にしかできない音の出し方を想像できるようにすること。

ウ 生徒が全身の動きを把握できるようにすることで、自分の弾き方と先生の弾き方との違いをなくすために何が必要かを明らかにしていくこと。

エ 先生が求める音の出し方を、生徒が目だけでなく耳でも確認できるようにし、体の造りの違いを踏まえた上で練習に臨めるようにすること。

問八 —— 線6 「ひとつひとつ」を含んでいます」とありますが、

それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピアノ演奏というひとつのジャンルにおいて、テクノロジーが果たす役割は大きくなりつつあるが、それは個々のピアノストだけでなく、ピアノという楽器の可能性と限界を明らかにするものでもある、ということ。

イ テクノロジーは、ピアノストが表現できる領域を大きく広げ、これからも様々なことを実現するものと期待されているが、一方で、テクノロジーに頼らざるを得ない人間の不完全さを浮き彫りにしてもいる、ということ。

ウ テクノロジーは、ピアノストに対して、体を持つ可能性についての気づきを与えると共に彼らが表現できる領域を広げはしたが、その反面、個々の人間の体の動きには限界があることを示してもいる、ということ。

エ ピアノストがそれぞれの体の限界を意識しながら理想の音を鳴らすことに向かうのと同じように、古屋さんも、自己の能力に限界があることを自覚した上で、テクノロジーのさらなる進歩を目指している、ということ。

【国語】

解答用紙(中学第二回)

受験番号				
------	--	--	--	--

氏名	
----	--

得点	
----	--

①

こと
ゆて

 ②

まこう

 ③

そんしょう

 ④

しせん

 ⑤

けつるい

⑥ 問一 a b 問二 A B

問三 問四 (1) (2) (3) 問五

⑦ 問一 a b c

問二 A B C D

問三 問四

問五

問六 問七 問八

